

# 『オデュッセイア』における不忠の召使たちの処刑 ——主人としての立場と怒り——

木和田安寿

## はじめに

『オデュッセイア<sup>1</sup>』第22歌において、侍女たち12人と山羊飼いまランティオスの処刑が行われる。侍女たちの処刑方法の残酷さについては実行者であるテーレマコス<sup>2</sup>の宣言から明らかである。同時に、山羊飼いまランティオス<sup>2</sup>の処刑方法についても、残酷な方法で行われている。

これらの処刑の残酷性については、その残酷さがオデュッセウスの屋敷内での復権を示唆し<sup>3</sup>、テーレマコスのオデュッセウスの後継としての立場を確立する行為である<sup>4</sup>とみなされている。オデュッセウスたちが家の安寧を取り戻すうえで、これらの処刑が必要であったと見てよいだろう。

また、その実行者についても意見が分かれている。Stanford や中務はまランティオスの処刑についてテーレマコスは参加せず、豚飼いまウマイオスと牛飼いまピロイティオスだけが行ったとするが<sup>5</sup>、Fernández-Galiano らはテーレマコスもこの処刑に立ち会ったと解釈する<sup>6</sup>。筆者は後者の説をとり、テーレマコスが作品中で成長を遂げたことを明示するべくこのように描写されているという立場をとる。

拙論は、テーレマコスがすべての残酷な処刑に参加したことと、その意義を、彼の立

---

<sup>1</sup> 本論文は原則として Allen による校訂本を用いるが、適宜 West による校訂本も参照する。また日本語訳は筆者によるものである。

<sup>2</sup> 叙事詩中ではまランテウス *Μελανθέυς* と呼称されることもあるが、本論文では日本語表記をまランティオスで統一する。

<sup>3</sup> Segal(1971, 14 n. 2.)はまランティオスの処刑が四肢損壊であることに注目し、死体損壊の脅迫は求婚者たちの無法な暴力の発現を強調する場面で起きるものであるにもかかわらず、まランティオスの四肢損壊は受け手にそのようなシーンが来ると思わせないうちに突然起きるため、この場面は『オデュッセイア』における「重大な例外」だとしている。その上で Newton(1997, 5-7)は、この例外的な行為であるまランティオスの処罰がテーレマコス以下3名の手で行われたことは、オデュッセウスが家の支配権を取り戻し、秩序を再び得たことを強調すると理解している。

<sup>4</sup> Dimock(1989, 314)は忠誠という観点から処刑を正当なものとしてみなし、テーレマコスが父親の後継者となるに値するものとなったことを示していると解釈している。

<sup>5</sup> Stanford, 1959, ad 22. 474-477; 中務, 661, 注釈 25

<sup>6</sup> Fernández-Galiano, 1992, ad 22. 474-477; cf. Dimock, 1989, 314; 小川, 2021, 272

場の変化や怒りに注目しながら明らかにする。そのため、ペーネロペイア、エウマイオス、オデュッセウスに注目し、彼らが主人<sup>7</sup>として不忠の召使たちに対する場面と、彼らのテーレマコスに対する認識が未熟な青年から家の主人たりうる人物へと変化していることについて確認する。同時に、これらの怒りが彼らを一つの家に属する者として結び付ける機能を果たし、また主人の立場を家の内外に示すものとして描かれていることを示す。これにより、彼がすべての残酷な処刑に参加したことが、家を害する者に対して怒りを示す存在である主人たりうる者としての立場を確立していった結果であると示すことを目指す。

## 1. ペーネロペイア

### 1-1. ペーネロペイアの怒り

ペーネロペイアはオデュッセウスの代理として家の主人(ἄναξ)として行動するわけではないものの、家の女主人(δέσποινα)として屋敷内の給仕や仕事を取り仕切っている。求婚者たちに対して退去を命じるなどの行動をとることはないが、侍女たちに対してその振舞いを非難する場面が見られることから、この立場の違いがうかがえる。つまり、彼女は家の内部に所属する者たちに対しては主人である一方、家の外から来る者たちに対しては家の主人として行動できてはいないのである。また、彼女はオデュッセウスを客人として迎え接待の主人役(ξείνος)として接待する。この立場にある彼女が、不忠の召使たちの言動に対して怒りを示す場面がある。

まず第 19 歌 154 行で、ペーネロペイアは機織りの策略を求婚者たちに伝えた侍女に

---

<sup>7</sup> 主人を示す単語は ἄναξ や βασιλεύς、ξείνος と複数あるが、ここではそれぞれの意味を区別する必要がある場合を除き、「主人」と表記することとする。それぞれの意味を重視する場合は、「主人(ἄναξ)」という形で表記する。なお、それぞれの語の意味に関しては、Cunliffe ἄναξ; *Lfgre* ἄναξ B; LSI ἄναξ A、Cunliffe βασιλεύς; *Lfgre* βασιλεύς B; LSI βασιλεύς A、Cunliffe ξείνος; *Lfgre* ξείνος B; LSI ξείνος A を参照。なお、Yamagata(1997, 1-12)によれば、ἄναξ は lord や master と、βασιλεύς は king と訳されるのが通例であるが、しばしば同一の人物に対して用いられ、意味も大変似通ったものである場合が多く、翻訳者の間でも使い分けに混同が見られる。しかしながら、「ἄναξ は 'a master of the house' の意味を持つが、βασιλεύς にその用例はない」というのが研究者の意見の一致するところである(Yamagata, 1997, 1)。また、根本(1988, 1-2)によれば、『オデュッセイア』で ξείνος が「主人役」として用いられているのは全 201 回中 2 回のみであり、Yamagata(1997, 9)によれば、異国からの訪問者を王として迎え入れるのは βασιλεύς に求められる役割である。一見、ξείνος を「主人役」として用いるのは不相当であるように見える。しかし、階級的に上位に位置しない人物であるエウマイオスも「主人役」として行動する場面があるため、本研究では「接待の主人役」としては ξείνος を用いることとする。上述のように ἄναξ、βασιλεύς と ξείνος では「主人」の意味するところが政治的社会的なものや友好関係の上にあるものと異なるが、拙論ではテーレマコスの立場を示すものとして重要な概念であるとして同時に取り扱うものとする。また、同様に王や主人の意味を持つ κρείων や δέσποινα などはテーレマコスに対しての用例に乏しいため立ち入らない。

ついで「*διφάσ, κύνας οὐκ ἀλεγούσας* 侍女たち、敬意を払わない雌犬ども」と、恥知らずな者を罵る語である *κύων*<sup>8</sup>を用いて非難し、求婚者たちに加担している不忠を咎める。彼女は侍女たちと主従一体となり<sup>9</sup>、オデュッセウスの屋敷に住む女性として家の維持に関心を寄せて苦難のただ中にいる。にもかかわらず、この侍女はペーネロペイアの策略を妨害し、婚姻の返答をしなければならぬ状況に追いやっている。この場面では侍女の裏切りに対し、彼女らの主人としてペーネロペイアは怒りを示す。

また、場面としての順は前後するが、第19歌66行以下でペーネロペイアが夫の消息を聞き知るためにオデュッセウスが屋敷に留まることを認めている<sup>10</sup>にもかかわらず、侍女メラントー<sup>11</sup>が居残っている客人を罵る。この場面では、ペーネロペイアは彼女の不忠への糾弾をより具体的な内容で行っている。

πάντως, θαρσαλέη, κύων ἀδεής, οὐ τί με λήθεις  
ἔρδουσα μέγα ἔργον, ὃ σὴ κεφαλή ἀναμάξεις (19. 91-92)  
まったく、図々しい女、恐れ知らずの犬め、お前が大それたことをしているのが  
私に気付かれないことは決してない、お前の頭で罪の汚れを洗うことになるだろう。

機織りの策略を妨害した侍女に対して用いたのと同様に、ここでも *κύων* を用いている。さらに、*θαρσαλέος*<sup>12</sup>と *ἀδεής*<sup>13</sup>は肯定的な意味も否定的な意味も持つ語ではあるが、この場面では罵りの意を込めた言葉としてとるべきである。さらに、*μέγα ἔργον* の指す内容について、『オデュッセイア』への古註<sup>14</sup>ではメラントーが客人としてもてなすべき相手に対して侮辱を加えたこととされ、また西村は侍女たちが求婚者たちと通じて関係を持

<sup>8</sup> Cf. LSJ *κύων*; 『オデュッセイア』では他の場面では、オデュッセウスについて 17. 248(メランテイオス); 侍女たちについて 19. 372(エウリュクレイア); 特にメラントーについて 18. 338(オデュッセウス), 19. 91(ペーネロペイア); 求婚者たちに対して 22. 35(オデュッセウス)で使われている。( )内はいずれも話者を示す。

<sup>9</sup> 西村, 2013, 3

<sup>10</sup> 具体的なやり取りは 17. 529-588 でエウマイオスを介して行われている。

<sup>11</sup> 彼女は不忠の侍女の代表として登場する。18. 322-325 では *τὴν Δολίος μὲν ἔτικτε, κόμισσε δὲ Πηνελόπεια, / παῖδα δὲ ὡς ἀτίλλα, δίδου δ' ἄρ' ἀθήματα θυμῷ / ἀλλ' οὐδ' ὡς ἔγε πένθος ἐνὶ φρεσὶ Πηνελοπείης, / ἀλλ' ἤγ' Εὐρυμάχῳ μισγέσκετο καὶ φιλέσκεν*。「彼女をドリオスが産み、そしてペーネロペイアが養い、わが子のように育て、興味の向くおもちゃを与えてやっていた。しかしそんなふうであったのに彼女はペーネロペイアのために悲しむ気はなく、彼女はエウリュマコスと交わり愛していた。」と語られている。

<sup>12</sup> Cf. LSJ *θαρσαλέος* A. 2. “in bad sense, *overbold, audacious*”; Cunliffe *θαρσαλέος* (2) “Over-bold, audacious, presuming”

<sup>13</sup> Cf. LSJ *ἀδεής*(A) 2. “*fearless*”; Cunliffe *ἀδεής* (2) “Bold, too bold”

<sup>14</sup> Dindorf, 1855, 672; ad 19. 92

ったことである<sup>15</sup>と解釈する。つまりこのペーネロペイアの発言は、不忠の侍女たちへの怒りと不信感の表れである。

このようにペーネロペイアが怒りをあらわにして叱責したのは、主人として自身の立場を示すためである。

## 1-2. ペーネロペイアとテーレマコス

ペーネロペイアが侍女たちの主人として怒りをたびたび示す一方で、同じく屋敷内で過ごしていたテーレマコスが怒りを示すことはない。彼は「オデュッセウスのような男がいらないから家を守ることができない(2. 58-59)」と述べる。ペーネロペイアも彼のことを「まだ子供で、苦労も人前で話すこともよく知らない(4. 818)<sup>16</sup>」と述べる。つまり、テーレマコスは自身を主人に値する者だと見なしておらず、ペーネロペイアからもそう見なされていない。

しかし彼が屋敷に戻って以降、ペーネロペイアからの認識に変化が見られる。第18歌でテーレマコスと語り合う場面では、彼が青年期に達したことを認めている<sup>17</sup>。さらに、物乞いが求婚者たちに無礼な仕打ちを受けていることについて、何も行わない彼を咎め<sup>18</sup>、さらにそれはテーレマコスの汚名となると忠告する<sup>19</sup>。ここでペーネロペイアは物乞いを客人と呼んでいるため、この客人の扱いについて咎めているということから、テーレマコスに主人として振舞うよう期待していると考えられる。また、彼女は迎え入れた客人への求婚者たちからの暴行を制止することも同時に求めている。このように、彼女はテーレマコスに様々な面で主人として行動することを要請している。この点から、不忠の召使たちや求婚者たちといった、家を害する者たちに怒りを示すことは主人の役割と考えられる。

この後で彼女は、求婚者たちの前で「息子の髭が生えそろうのを見るころになったら、家を出てあなたが望む男に嫁げ(18. 269-270)」とオデュッセウスがトロイエーへ出征する

---

<sup>15</sup> 西村, 2013, 6

<sup>16</sup> νήπιος, οὔτε πόνων ἐν εἰδῶς οὔτ' ἀγοράων. 第1歌においてペーネロペイアがペーミオスに対してアカイア勢のトロイエーからの帰国について語ることを止める場面で、テーレマコスは彼女を制止し、機織りや糸紡ぎに精を出すように勧める(1. 356-359)。ペーネロペイアは驚嘆し(θαμβήσασα), もっともなことだと(μῦθον πεπνυμένον)考えて従っている。つまり第1歌においてテーレマコスの成熟の萌芽は描写されているのだが、第4歌でのペーネロペイアの評価はこのように未熟な子供のままである。

<sup>17</sup> 18. 217; νῦν δ', ὅτε δὴ μέγας ἔσσι καὶ ἡβῆς μέτρον ἰκάνεις, 今やあなたは大きく青年期に到達し,

<sup>18</sup> 18. 220-222; οὐκέτι τοι φρένες εἰσὶν ἐναίσιοι οὐδὲ νόημα, / οἶον δὴ τόδε ἔργον ἐνὶ μεγάροισιν ἐπύχθη / ὄς τὸν ξείνον ἔσασας ἀεκισθήμενοι οὐτως. 屋敷のうちで客人がこのように不当に扱われるというこの仕打ちを放っておいたので、あなたの心も思考もはやまともではない。

<sup>19</sup> 18. 225; σοί κ' αἴσχος λῶβη τε μετ' ἀνθρώποισι πέλοισι. 人々の間では、あなたにとって恥ずべき行為であり不名誉であるだろう。

際に言ったと話す。求婚の答えを先延ばしにし続けていたペーネロペイアが、その答えを出そうというそぶりを見せる。これは求婚者たちから贈り物をせしめるための策略であるのだが、テーレマコスが成人し主人にふさわしい人物になったからこそ実行できた行動である。また、テーレマコスが策略にも知力にも優れていることは求婚者たちも認めており、彼らはテーレマコスが自身らの障害となることを危惧している(16. 372-374)。このようにこの場面ではペーネロペイアにも求婚者たちにも、テーレマコスが主人となりうる存在であることが認識されている。さらにテーレマコス自身も、求婚者たちに対して第 17, 18, 20 歌でのオデュッセウスへの暴行に対する非難で顕著であるが、次第に態度を硬化させ厳しい言葉をかけている。このため、彼の自身が家の主人たりうる者であるという自覚が言動に表れていることがうかがえる。この変化が求婚者殺害だけでなく、不忠の召使たちの処刑へも繋がっている。

第 22 歌での召使たちの処刑までに、テーレマコスはペーネロペイアから主人となりうる者として認識されていることが明らかとなった。そして彼は、ペーネロペイアのそばで彼女の苦境を見続け、不忠の侍女たちの行動も知っている。オデュッセウスとの語らいで、不忠の侍女たちの存在を仄めかしている(16.316-320)ことがその証である。彼は旅に出るまでは、この不忠の侍女たちに怒りを抱いていたとしても、彼女らを咎める立場になかった。しかし、第 22 歌での処刑においてはそれまでと異なり、ペーネロペイアの立場を引き継ぎ、処刑に向かうことになる。

## 2. エウマイオス

### 2-1. エウマイオスの怒り

豚飼いエウマイオスの変わることのない忠誠は女神アテーネーも認めている。彼女はオデュッセウスに、身を寄せるべき忠実な召使として彼を示す(13.404-406)。彼はオデュッセウスを、歓待の慣習に則って行うべき要素をほとんど満たした方法で迎えている<sup>20</sup>。異国から来た<sup>21</sup>物乞いとしてのオデュッセウスとの関係において、この場ではエウマイオスは歓待の主人役(ξείνος)の立場にある。

エウマイオスは自身の役目でもある屋敷への豚の引率も行いつつ、オデュッセウスを

---

<sup>20</sup> Reece, 1993, 146-148; この場面の歓待では入浴が手順から飛ばされているが、他の要件はすべて満たされている。もっとも、有力者による歓待の例とは、用いる道具の種類などの点で異なっている。

<sup>21</sup> これはオデュッセウス自身がクレーターの出であると嘘の身の上話をした(14. 199-359)こともあるが、Rose(1979, 217-218)はオデュッセウスがエウマイオスの家に身を寄せる第 14 歌で彼の飼い犬に吠え立てられている一方、テーレマコスは第 16 歌で吠えられていないことに注目し、ここではオデュッセウスがイタケーではよそ者として認識されていると指摘している。

屋敷へと送る道中で、山羊飼いメランティオス<sup>22</sup>と鉢合わせする。この時、山羊飼いは「νῦν μὲν δὴ μάλα πάγχυ κακὸς κακὸν ἡγηλάζει (中略) πῆ δὴ τόνδε μολοβρόν ἄγεις, ἀμέγαρτε σαρβῶτα なんとということか、卑しい者が卑しい者を連れていくぞ、(中略)そのごうつくばりの豚<sup>23</sup>をどこへ連れて行く気だ、みっともない豚飼いめ(17.217,219)」と述べ、二人を中傷する。さらにオデュッセウスの腰骨のあたりを蹴りつける(17.233-234)。エウマイオスはこの言動に対して怒り、「ἰβρίζων 思い上がっている(17.245)」と非難し、客人に対する暴行を歓待の主人役として咎める姿勢が見て取れる。

さらに、歓待の主人役と物乞いの関係をメランティオスが脅かしたということも、エウマイオスが怒りを示した一因として考えられる。詳しくは後述するが、この歓待の主人役と物乞いの関係はエウマイオスと物乞いの間だけでなく、テーレマコスと物乞いの間にも生じている。メランティオスからすれば後者の関係は予想だにしないものではあるが、彼の物乞いに対する暴言と暴行は、エウマイオスにとっては自身とテーレマコスに対して二重の意味で歓待の主人役と客人の関係を踏みこむものである。この歓待の主人役という立場からエウマイオスはメランティオスに対して怒りを示し、彼を非難する言葉を発する。

しかし、エウマイオスの怒りはメランティオスによる侮辱と暴行だけが理由ではない。彼が普段から農場にいるよりも町中において、求婚者たちと交わっていることを批判し、オデュッセウスの帰還と、その彼がメランティオスを罰することをニュンペーたちに祈願する(17.240-246)。さらにこの祈願は、彼女らに対して供犠を行ったオデュッセウスにかけて行われている<sup>24</sup>。つまり、この場面でのエウマイオスは物乞いに対する歓待の主人役として怒ると同時に、同じ主人のもとにいる召使の立場からメランティオスに対して怒り、不忠の召使を罰し、求婚者たちを屋敷から排除できる主人を求めている。

屋敷に到着してから、オデュッセウスは愛犬アルゴスの無残な姿<sup>25</sup>を発見する。この状況についてエウマイオスは「気のまわらない女たちは彼を世話しないでいる。王たち(ἄνακτες)が決して力をふるっていないときには、召使という者は決して正しいことをし

---

<sup>22</sup> メランティオスはメラントーの兄弟である。メラントーと同じく、求婚者たちの中心人物であるエウリュマコスのお気に入りであり、またオデュッセウスたちによる求婚者殺害の場面でも求婚者たちのために行動している。

<sup>23</sup> Russo(1992, 28; ad 17. 219)によれば μολοβρός の原義は定かでないものの、この後に物乞いの意地汚さを罵る発言が続くことを踏まえ、このように訳した。

<sup>24</sup> 17. 240-242; εἴ ποτ' Ὀδυσσεὺς / ὕμμι' ἐπὶ μηρῖ ἔκειε, καλύψας πῖονι δημῷ. / ἀρνῶν ἠδ' ἐρίφων, τόδε μοι κρηῖνατ' ἐξέδωρ, もしもかつてオデュッセウスが、あなた方に厚くついた脂肪で包んだ羊か子山羊の大腿の骨を捧げたことがあったなら、私のこの願いをかなえてください、

<sup>25</sup> 17. 291-304; アルゴスの憐れむべき状態の意味するところについては Rose(1979, 220-223)が詳しい。彼によれば、アルゴスは主人への忠誠の模範であり、同時に求婚者たちの支配への痛烈な非難として登場している。

ようとはしないのだ<sup>26</sup>」と語り、主人の不在が召使たちの墮落を引き起こすことをここで示す。そしてその結果、不忠の召使たちがアルゴスや忠実な召使たちに痛苦を与えていることも伝える。それと同時に、エウマイオスたちはこの窮状を理由として求婚者たちを屋敷から排除することもできないでいる。彼らの怒りを代弁し、求婚者たちに対等である正当な立場から立ち向かえる主人の必要性がこの場面で示される。

## 2-2. エウマイオスとテーレマコス

エウマイオスはオデュッセウスが不在の間も彼のことを何度も主人 ἄναξ(14. 40, 67, 139, 170, 366)と呼び、変わらぬ忠誠を示している。その一方でエウマイオスは、テーレマコスが自身の小屋を訪ねてきた際、「ὡς δὲ πατήρ ὄν παιῶν φίλα φρονέον ἀγαπάει 愛情深い父親が愛しい息子を迎え入れるように(16. 17)」応対し、「φίλον τέκος<sup>27</sup>愛しい息子よ(16. 25)」と呼びかけ彼に対する愛情を示す。この場面ではテーレマコスもエウマイオスに対し年長者への親愛の情を示す呼び方である<sup>28</sup>「ἄττα 爺や(16.31)」を用いて話し、彼ら二人は主従関係というよりも、父と子あるいは祖父と孫のような気安く親密な関係を形成している。

しかしその後、オデュッセウスを屋敷に送る際には、その理由を「ὡς ἐπέτελλεν ἄναξ ἐμός 私の主人が命じたので(17. 186)」と語りテーレマコスをも主人として認め、主従関係を形成している。エウマイオスは第 16 歌で彼と再会しているため、ἄναξ と呼ばれるようになるきっかけは第 16 歌と第 17 歌でのテーレマコスの言動にあると考えられる。

第 16 歌でテーレマコスはエウマイオスの小屋へ来た際、彼とオデュッセウスとともに食事をし、物乞いの出自を尋ねる(16. 46-66)など客人を迎える際にとるべき行動をとる。そして自分はこの客人を求婚者たちから守ってやることはできないものの、屋敷に迎え入れたならもてなす意志を示す(16. 66-89)。そして第 17 歌でテーレマコスは屋敷に戻る際には母を気遣い、また物乞いに過ごしやすい状況を提供しようとする姿勢を見せている(17. 6-15)。この後、エウマイオスはテーレマコスを ἄναξ と呼んでいる。このことから、エウマイオスはテーレマコスの振舞いを見ることによって、主人たりうる者として認めたことがわかる。

弓競べの際にもこの認識は表れており、物乞い姿のオデュッセウスが自身も弓競べに参加したいと述べてから、求婚者たちとペーネロペイアの間で口論となる(21. 275-342)。ここで場を収めたのはテーレマコスであり、「τόσον μὲν Ἀχαιῶν οὐ τις ἐμείο / κρείσσων ᾧ κ'

<sup>26</sup> 17. 319-321; τὸν δὲ γυναικὲς ἀκηδέες οὐ κομέουσι / δμῶδες δ', εὐτ' ἂν μηκέτ' ἐπικρατέωσιν ἄνακτες, / οὐκέτ' ἔπειτ' ἐθέλουσιν ἐναίσιμα ἐργάζεσθαι

<sup>27</sup> 実際の血のつながりはなくとも、年長者が若者を υἱός や παῖς, τέκνον と呼ぶ例はホメロスにおいては多く見られる。

<sup>28</sup> Hoeksta, 1989, 266; ad 16. 31

ἐθέλω, δόμεναί τε καὶ ἀρνῆσαισθαι 弓においては、私が他者にそれを与えること拒むことを望もうとも、私よりも強い権限を持つ者はいない(21.344-345)」と自身の立場を表明する。さらに求婚者たちに弓を運ぶことを咎められたエウマイオスに対しても「ἄττα, πρόσω φέρε τόξα 爺や、さっさと弓を持っていけ(21.369)」と命じ、ἄττα と帰国した際に用いた呼称を用いながらも、その際に表れていた疑似的な親族関係から、主人たりうる者とそれに仕える召使という主従関係にあることを明示する。

### 3. オデュッセウス

#### 3-1. オデュッセウスの怒り

第17歌以降、物乞い姿のオデュッセウスは何度も暴行され悪態をつかれる。彼は本来であれば家の主人であるが、この場では物乞いとしての立場に甘んじて耐えなければならない。このため、オデュッセウスの怒りは求婚者たちや不忠の召使たちに向けられるが、発言で示されることはあっても何らかの処罰を加えることはない。

オデュッセウスがメランティオスに出会って罵られることは既に述べたが、この場面でのオデュッセウスの反応について、叙事詩の中では典型的な表現が他の場面では見られない特異な仕方で行われる。

τοὺς δὲ ἰδὼν νεῖκεσεν ἔπος τ' ἔφατ' ἕκ τ' ὀνόμαζεν,  
ἐκπαγλον καὶ ἀεικέες ὄρινε δὲ κῆρ Ὀδυσῆος (17.215-216)  
彼(メランティオス)は彼らを見て罵り、乱暴な言葉で慎みなく  
言葉を言い名前を呼んだ。そしてオデュッセウスの心を揺り動かした。

「ἔπος τ' ἔφατ' ἕκ τ' ὀνόμαζεν 言葉を言い名前を呼んだ」という言い回しは『オデュッセイア』では頻出する表現であるものの、「ἐκπαγλον καὶ ἀεικέες 乱暴な言葉で慎みなく」と組み合わせられて用いられるのは一度だけである<sup>29</sup>。さらに、この後の暴行に対してのオデュッセウスの反応は「ὁ δὲ μερμήριξεν Ὀδυσσεύς / ἤε μεταίξας ῥοπάλω ἐκ θυμὸν ἔλιπτο, / ἢ πρὸς γῆν ἐλάσειε κάρη ἀμρουδὶς ἀείρας. / ἄλλ' ἐπετόλμησε, φρεσὶ δ' ἔσχετο· オデュッセウスは後を追ってこん棒で殺そうか、胴体を持ち上げて頭を落としてやろうか、あれこれ胸中で考えた。しかしぐっとこらえて、心中で耐えた。(17.235-238)」と語られている。「A しようか B しようか考え、B を行うことに決めた」という二つの行動を比べて後者をとる描写がホメロスにおける定型表現であり、A は感情的な主張で、B は理性的な主張で描

<sup>29</sup> Edwards, 1970, 33



かれる<sup>30</sup>。しかしここでは、AもBも感情に任せられた選択肢となっている<sup>31</sup>。結果として、オデュッセウスは「耐え忍ぶ」という第三の選択肢をとる。メランティオスへの激しい怒りがこの特異な使われ方に結び付いていると考えられるが、この場面のオデュッセウスはメランティオスの無礼に対して行動せず耐えている。

続いて、不忠の侍女たちが求婚者たちと会いに行こうとする場面(20.5-8)で、オデュッセウスは「ἤε μεταίξας θάνατον τεύξειεν ἑκάστη, / ἢ ἔτ' ἔφ' μνηστήρσιν ὑπερφιάλοισι μιγῆναι / ὕστατα καὶ πύματα, κραδίη δέ οἱ ἔνδον ὑλάκτει. 詰め寄ってそれぞれに死をもたらしてやろうか、あるいは思い上がった求婚者たちと交わることを今回限り最後としてまだ許そうか、彼の心中で心は吠えてた。(20.11-13)」と悩み悩む。メランティオスの場面と同じく、「AしようかBしようか考え、Bを行うことに決めた」と描写される。この場面でも耐え忍ぶことを選ぶ。しかし、同時に憤懣やるかたない状態にある<sup>32</sup>。オデュッセウスは召使たちの行動に対し、自身の正体を隠しているため主人として彼らの無礼や不忠を咎めることができず、怒りを募らせたままになっている。

### 3-2. オデュッセウスとテーレマコス

このように、オデュッセウスは屋敷のうちで不忠の召使たちの言動に悩まされる。これらについては、屋敷に戻る前にエウマイオスの小屋で求婚者たちの殺害を計画する際にテーレマコスに忠告されている。テーレマコスは召使たちのうちで忠誠心を調べるのであれば女たちにするように言い(16.316-320)、不忠の召使たちの存在を示し、オデュッセウスよりも家の状況を知っていることを伝えている。彼にとって、テーレマコスの助言は主人としての自負を示すものと聞こえただろう。実際、次に見ていくようにオデュッセウスが屋敷内で不忠の召使たちに言い返す際にはテーレマコスを頼る発言をする場面があり、これは彼を主人たりうる者として認めている表れであると考えられる。

この認識の表れは、オデュッセウスがメラントーから中傷を二度受けるなかで段階的に示される。まず第18歌で、彼女は彼が宴に参加していることを罵り咎める(18.327-

<sup>30</sup> Russo, 1992, ad 17. 235-238

<sup>31</sup> de Jong, 2001, ad 17. 235-238

<sup>32</sup> 犬が吠える様子を語るのに用いることが専らである ὑλάω や ὑλακτέω が、心が猛っているさまを表すために用いられる(22.13-16)ことから、この場面でもオデュッセウスが怒る様子が子を守って吠え立てる犬の比喩(20.14-15)を用いた描写がされるため、同様に彼の怒りがうかがえる。これらの語の使用については Rose(1979, 215-230)に詳しく、エウマイオスの飼っている犬たちに吠え立てられたことや、第19歌でオデュッセウスの証として語られている「小鹿を捕える猟犬の描かれたブローチ」の描写を分析することで、この場面でオデュッセウスを犬に例えることが怒りの激しさを示すだけでなく、物語全体に繋がりを持たせながら『オデュッセイア』後半の構造に深く絡む連想を聴衆に抱かせる効果を上げていることを指摘している。

336). オデュッセウスはこれに対して怒りを示して<sup>33</sup> 「ἢ τάχα Τηλέμαχος ἔρέω, κύον, οἷ ἄγορεύεις, / κεῖσ' ἔλθόν, ἵνα σ' αἴθι διὰ μελεῖσσι τάμησιν. 私はお前の言うことを、犬め、すぐにもテーレマコスに伝えよう、あちらへ行って、そこでお前の四肢をすっかり切り刻むように. (18.338-339)」と発言する。この発言で重要なのは、オデュッセウスが物乞いとして振舞う中で、メラントーの無礼をペーネロペイアではなくテーレマコスに報告すると脅す点である。

続いて、第19歌でも同様のことが起きる。こちらでもメラントーが物乞いを追い出そうとするが、この時もオデュッセウスは彼女の無礼を咎める際にテーレマコスからの処罰に言及する。

μή πώς τοι δέσποινα κοτεσσαμένη χαλεπήνη,  
ἢ Ὀδυσσεὺς ἔλθῃ· ἔτι γὰρ καὶ ἐλπίδος αἴσα.  
εἰ δ' ὁ μὲν ὡς ἀπόλωλε καὶ οὐκέτι νόστιμός ἐστιν,  
ἀλλ' ἦδη παῖς τοῖος Ἀπόλλωνός γε ἔκρητι,  
Τηλέμαχος· τὸν δ' οὐ τις ἐνὶ μεγάροισι γυναικῶν  
λήθει ἀτασθάλλους', ἐπεὶ οὐκέτι τηλικός ἐστιν. (19. 83-88)

女主人がお前に腹を立てて怒ることがありませんように、あるいはオデュッセウスが帰ることのないように、というのもまだ希望はあるのだから。そして、もし彼が言われるように死んでいてもはや帰国の日はないとしても、すでに息子がアポローンの助けを得てそのようになっている、テーレマコスが。そして女たちのうちの誰も、無思慮に振舞っていて彼に気付かれないことはない、彼はもはやそんな歳ではないのだから。

オデュッセウスはメラントーを罰する者として三人の名を挙げる。ここでもテーレマコスの名を挙げ、彼がオデュッセウスのように主人の役割を果たすことを期待している。そして「ἐπεὶ οὐκέτι τηλικός ἐστιν 彼はもはやそんな歳ではないのだから」と述べ、彼が子供から成熟した大人になったことをオデュッセウスは認めている。

このように、オデュッセウスはテーレマコスを主人たりうる者と認め、不忠の召使たちの処刑を彼に委ねるに至る。屋敷内の状況を知るテーレマコスが、オデュッセウスが実際に不忠の召使たちに出会うのに先駆けて彼らの不忠を示し、それをオデュッセウスが経験する形で彼らの怒りの共有がなされている。

<sup>33</sup> 18. 337; τὴν δ' ἄρ' ὑπόδρα ἰδὼν προσέφη πολύμητις Ὀδυσσεύς: 「知恵のまわるオデュッセウスは彼女を眉の下から見て言った」 「ὑπόδρα ἰδὼν 眉の下から見て」は怒りを示す表現である。

#### 4. テーレマコスによる処刑

ここまでペーネロペイア、エウマイオス、オデュッセウスの怒りと、彼らとテーレマコスの関係の変化を確認してきた。その結果、彼が主人たりうる者としての立場を認められていることが明らかとなった。また、召使処刑の前に行われた求婚者殺害ではオデュッセウスが中心を担っていたが、この召使処刑の場ではテーレマコスら三人に処刑の指示を出して委ねる。このことから、テーレマコスの主人たりうる者としての立場の確立がオデュッセウスに認められていることが明らかである。

ὡς ἄρ' ἔφη, καὶ πείσμα νεὸς κυανοπρόροιο  
κίονος ἐξάντας μεγάλης περιβάλλε θόλοιο,  
ὕπόσ' ἐπεντανύσας, μὴ τις ποσὶν οὐδ' αἶμα ἴκοιτο.  
ὡς δ' ὅτ' ἂν ἡ κίχλαι τανυσίπτεροι ἠὲ πέλειαι  
ἔρκει ἐνπλήξωσι, τό θ' ἐστήκη ἐνὶ θάμνω,  
αὔλιν ἐσιέμεναι, στυγερός δ' ὑπεδέξατο κοῖτος,  
ὡς αἶ γ' ἐξείης κεφαλὰς ἔχον, ἀμφὶ δὲ πάσαις  
δειρήσι βρόχοι ἦσαν, ὅπως οἴκτιστα θάνοιεν.  
ἦσπαιρον δὲ πόδεσσι μίνυθά περ, οὐ τι μάλ' αἶμα δὴν. (22. 465-473)

このように(テーレマコスは)言うと、群青に塗られた舳先の船の綱を大きな柱に結び付け円堂に巻き付けた、  
びんと高く張って、誰も足を地面につけられないように。  
それはまるで、羽の長いツグミかハトが寝床へと  
向かう途中、茂みに仕掛けられた罠にかかって  
忌むべき寝床に迎えられるように、  
そのように彼女たちは頭を一列に並べ、輪縄は全員の  
首のそばにあった、最もむごたらしく死ぬようにと。  
そして少しの間足でもがいていたが、それもけっして長くはなかった。

侍女たちの処刑方法は絞首が選ばれる。侍女たちの処刑場面では全ての動詞が単数形で語られ、テーレマコス一人で行ったことが示される。これについては、彼が第16歌でオデュッセウスに対して述べていた侍女たちへの不信感に、処刑を率先して行う理由を見出せる。オデュッセウスが召使一人一人の忠誠心を試すように提案した際に、テーレマコスは侍女たちのみに絞ることを勧める<sup>34</sup>。この段階ではオデュッセウスよりもテーレ

<sup>34</sup> 16. 316-319; ὄλλ' ἢ τοὶ σε γυναικας ἐγὼ δεδάσθαι ἄνωγα, / αἶ τέ σ' ἀπιμάζουσι καὶ αἶ νηλείτιδες εἰσιν /

マコスの方が屋敷内の状況に詳しいことが示される。つまり、テーレマコスが家の主人としてオデュッセウスを凌駕した場面である。この主人たりうる者としての立場からの侍女たちへの不信感と怒りは、処刑の場面でも再度述べられる。

μη μὲν δὴ καθαρῶ θανάτῳ ἀπὸ θυμὸν ἐλόιμην  
τάων αἰ δὴ ἐμῆ κεφαλῇ κατ' ὀνειδέα χεῦαν  
μητέρι θ' ἡμετέρῃ παρά τε μνηστήρσιν ἴαιον. (22. 462-464)  
彼女らの命を綺麗な死に方で奪いたくはない、  
私の頭と私の母に恥辱を注ぎ、  
求婚者たちと夜を共にした女たちなのだ。

オデュッセウスの指示した斬首ではなく、テーレマコスは「καθαρῶ θανάτῳ 綺麗な死に方」ではない方法として絞首を選択している。求婚者殺害は剣や槍を用いて互いに争う戦闘行為だったが、召使処刑は主人から課される一方的な行為として行うことを、テーレマコスは宣言したということになる。これはオデュッセウスが処刑について、彼女らの不貞行為のみを理由としている一方で、テーレマコスはこれに加えて自身と母親の恥辱を残酷な処刑を行う理由として挙げていることにも繋がる。家を統べる者たちの名誉は長年にわたって求婚者たちと侍女たちによって何重にも傷つけられ、彼女らのとった行動は家を揺るがす重大な裏切りである。テーレマコスは侍女たちの長年にわたる屋敷内での不忠を認識し、ペーネロペイアの怒りを引き継いだ上で、その処刑の残酷さでもって主人たりうる者としての立場を打ち出している。さらに、この場面で表明したため、不忠の召使たちへの怒りをエウマイオスたちと共有することにも成功している。

この一方でメランティオスの処刑については、第22歌での求婚者たちとの戦闘中、オデュッセウスの命を受け、エウマイオスとピロイティオス<sup>35</sup>はメランティオスを「ὄς κεν δηθὰ ζῶὸς ἐὼν χαλέπ' ἄλγεα πάσχη. 彼が生きている間は長く苦痛を被るように(22. 173-177)監禁する。こののち、彼は中庭に引き出され処刑される<sup>36</sup>。

---

ἀνδρῶν δ' οὐκ ἂν ἐγὼ γε κατὰ σταθμοὺς ἐθέλωμι / ἡμέας πειράζειν, ἀλλ' ὕστερα ταῦτα πένεσθαι. そうでなく、私はあなたに女たちのことを見分けるようお勧めする、つまり彼女らがあなたの名誉を汚しているのか、あるいは罪がないかをだ。しかし私たちが農園で働く男たちを試すというのは、私は望まない、そうでなくこれらのことは後で行いたい、

<sup>35</sup> 彼が最初に登場したのは第20歌185-234行で、メランティオスが再びオデュッセウスを罵り、殴り合おうとした後である。この場面でピロイティオスは物乞いがただ者でないことを見抜き、自身が主人でなく他人のために山羊を育てることを嘆く。この発言を受けてオデュッセウスは、彼の変わらぬ忠誠心を認め、さらに「αὐτὸς ὁ τοῖνυντι φρένας ἵκει 分別が胸に備わった男(20. 228)」と高く評価している。

<sup>36</sup> Davies(1994, 535)は殺害でなく、手足の切断による処罰の描写であるとしている。

ἐκ δὲ Μελάνθιον ἦγον ἀνὰ πρόθυρόν τε καὶ αὐλήν·  
 τοῦ δ' ἀπὸ μὲν ῥινάς τε καὶ οὐατα νηλεῖ χαλκῶ  
 τάμινον, μῆδεά τ' ἐξέρυσαν, κυσὶν ὠμὰ δάσασθαι,  
 χεῖράς τ' ἠδὲ πόδας κόπτον κεκοτηῖτι θυμῷ. (22. 474-477)  
 そして彼らは屋敷から戸口と中庭へとメランティオスを引き出した。  
 そして彼から鼻と耳を無慈悲な剣で切り落とし、  
 犬に生のまま食わせるために睾丸を引き抜いて、  
 手足を怒る心のまま切り落とした。

メランティオスの処刑は複数形の動詞で語られ、テーレマコスが単独で行うのではなく、召使たちが参加していることを明示する。

オデュッセウスはエウマイオスとピロイティオスに、「Τηλεμάχου ἐτάρω τε κασιγνήτω τε ἔσσεσθον. お前たちはテーレマコスの仲間とも兄弟ともなるだろう。(21.216)」と述べる。これは彼らを家に属する者として再統合することの宣言、さらに、それまで以上に近い家族としてさえ家に迎えることをも含んだ発言であると考えられる<sup>37</sup>。そして求婚者殺害ではエウマイオスは牛飼いのピロイティオスとともにオデュッセウスに味方し<sup>38</sup>、メランティオスが納戸に侵入して武具を持ち出しているのを目撃する。オデュッセウスにこのことを報告する際、エウマイオスは彼のことを「ἄϊδηλος 悪党(22.165)」と罵る。この言葉は対象の性質が極めて有害なこと<sup>39</sup>を示し、忠実な召使から不忠な召使への、こらえきれない憤りを示唆する<sup>40</sup>。さらに、メランティオスを殺すか、今までの多くの行為の償いのために<sup>41</sup>連れてくるかするつもりだとエウマイオスは表明する。これはテーレマ

<sup>37</sup> その一方でオデュッセウスはこれに続いて、求婚者殺害が成功したならば、彼らの妻と財産と屋敷の世話をしやると約束する(14.63-65)。これは主人が召使の働きに対して報いるために与えるものとして了解されている。Hoekstra(1989, 197; ad 14. 64)は、この世話は伝統に則ったものであり、『イーリアス』第15歌498行やヘーシオドスの『仕事と日々』405行に類似の文言があると指摘している。

<sup>38</sup> 岡(1988, 136-140)は、エウマイオスとピロイティオスが求婚者殺害の場に参加しているのはメランティオスの不忠との対比として描かれており、彼らが英雄叙事詩の伝統において伝えられた人物であるとは考えられないため、『オデュッセイア』の中では新しい要素であると見なしている。彼らが *δῖος* と呼ばれるのは英雄に劣らないほどの活躍を行って初めて可能になり、このためにこのメランティオスが武器を運んでくる場面やその後には彼らが求婚者たちを殺す場面などが生じているとしている。

<sup>39</sup> Cunliffe, *ἄϊδηλος* “destroying, working destruction or harm, baneful”; また、『オデュッセイア』への古註(Dindorf, 1855, 709; ad 22. 165)では“ὀλέθρου ἄϊος”と説明されている。

<sup>40</sup> Fernández-Galiano, 1992; ad 22. 165

<sup>41</sup> 22. 168-169; ἰν' ὑπερβασίας ἀποτίση / πολλές ὄσσας οὗτος ἐμήσατο σὺ ἐνὶ οἴκῳ 彼があなたの家で企てた多くの悪事の償いをさせるため

コスの目の前で行われ、この怒りは長年にわたる裏切りに向けられたものであることが彼にも共有される。

また、この処刑に先立ってテーレマコスがメランティオスについて述べることはないが、求婚者殺害の場面で忠実な召使たちが助命を嘆願したところ、テーレマコスが彼らを助ける理由として「ἀνάτιον 罪がない(22. 356)」, 「ὄς τέ μεν αἰεὶ οἶκῳ ἐν ἡμετέρῳ κηδέσκειτο παιδὸς ἐόντος 私が子供だった時この人は私たちの屋敷の中で、いつも面倒を見てくれた(22. 357-358)」と述べる。長く求婚者側につき、この場面でもそのままのメランティオスをテーレマコスが主人として罰する理由がこの場面で先行して示されている。

つまり、この処刑は主人と彼に味方する忠実な召使たちの怒りの大きさを示すとともに、テーレマコスの新たな主人として、裏切った召使への断固たる制裁を下す立場を示すものとなる。このため、召使処刑は一方向的な行為として実行されなければならなかった。

このように、侍女たちとメランティオスの処刑に至るまでに三人がそれぞれの怒りを共有し、ともに事に当たる場面が描かれている。求婚者殺害以前からの怒りの行きつく先は、処刑の残酷さという形で示されている。これはテーレマコスが単独で彼らの処刑を行う以上に、彼が主人として、新たな家を構築しうる者となったことを示唆する描写である。

## おわりに

ここまで、ペーネロペイア、エウマイオス、オデュッセウスの怒りの描写やテーレマコスへの認識の変化についての分析を行い、その結果主人が家や客人を害する他者への怒りを示す社会的な立場にあることが明らかになった。そしてテーレマコスは物語序盤ではまだ幼く、主人たる者だとは見なされていない立場であったところから、終盤では彼らとのやり取りの中で主人たりうる者となったことを認められていることをも示した。

この姿勢と認識の変化が不忠の召使たちの処刑へと繋がっていき、テーレマコスは侍女たちを主人たりうる者として単独で処刑する。メランティオスの処刑では召使二人とも互いの怒りを理解しあって共同で行う。これらの処刑すべてに参加したことで、テーレマコスは家の再統合と再建、新たな家の構築の可能性を示す。これらの処刑の理由は、不忠の召使たちが家を統べる者たちの主人としての立場を揺るがし、求婚者たちに与するという家の秩序を破壊する行為を行ったことにある。このように、テーレマコス自身が侍女たちの処刑を行い、また召使たちと共にメランティオスの処刑を行っている。これは、彼が主人たりうる者として立場を確立し、新たな家の構築をなしうる者となった結果である。

## 参考文献

- Allen, T. W. (Ed.) 1922(1917). *Homeri Opera* 3, 4, Oxonii, 2nd edn.
- Stanford, W. B. (Ed.) 1948(2004). *Odyssey I-XII, XIII-XXIV*, Bristol Classical Press.
- West, M., L. (Ed.) 2017. *Odysea*, De Gruyter.
- ホメロス, 松平千秋訳, 1994, 『オデュッセイア 上下』, 岩波書店.
- ホメロス, 中務哲郎訳, 2022, 『オデュッセイア』, 京都大学学術出版会.
- Cunliffe, R. J. 1963. *A Lexicon of the Homeric Dialect*, new edn, Norman, University of Oklahoma Press.
- LfgvE = Snell, B. 1955. *Lexikon des frühgriechischen Epos*, Göttingen.
- LSJ = Liddell, H. G., and others 1996 *A Greek-English Lexicon with a Revised Supplement*, 9th edn, Oxford, Clarendon Press.
- de Jong, I. 2001. *A narratological commentary on the Odyssey*, Cambridge.
- Heubeck, A., West, S., and Hainsworth, J. B. 1988. *A Commentary on Homer's Odyssey* v.I, Oxford.
- Heubeck, A., and Hoekstra, A 1989. *A Commentary on Homer's Odyssey* v.II, Oxford.
- Russo, J., Fernández-Galiano, M., and Heubeck, A. 1992. *A Commentary on Homer's Odyssey* v.III, Oxford.
- Davies, M., 1994. "Odyssey 22. 474-7: Murder or Mutilation?", *Classical Quarterly* 44: 534-6.
- Dindorf, W. 1855. *Scholia Graeca in Homeri Odysseam ex Codicibus Aucta et Emendata* v.2, Oxford.
- Dimock, G. E. 1989. *The Unity of the Odyssey*, Amherst.
- Edwards, M. W. 1970. "Homeric Speech Introductions" *Harvard Studies in Classical Philology* 74: 1-36.
- Finley, M. I. 1982. *The World of Odysseus*, New York.
- Newton, R. 1997. "Odysseus and Melanthius" *Greek, Roman and Byzantine Studies* 38(1): 5-18.
- Reece, S. 1993. *The Stranger's Welcome: Oral Theory and the Aesthetics of the Homeric Hospitality Scene*, Ann Arbor.
- Rose, G. P. 1979. "Odysseus' Barking Heart" *Transactions of the American Philological Association* 109: 215-230.
- Segal, C. 1971. *The Theme of the Mutilation of the Corpse in the Iliad*, Leiden.
- Yamagata, Naoko 1997. "ἄναξ and βασιλεύς in Homer", *The Classical Quarterly* 47(1): 1-14.

- 岡道男, 1988, 『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 創文社.
- 小川正廣, 2021, 『ホメロスの逆襲 それは西洋の古典か』, 名古屋大学出版会.
- 西村賀子, 2013, 「三つの関係軸が絡み合うところ: 『オデュッセイア』 第 22 歌 465-477 行」, 『西洋古典学研究』 61 : 1-11.
- 根本英世, 1988, 「ホメロスにおける *xeinos* について その 2」, 『西洋古典論集』 5 : 1-14.